

作業療法学科の基礎教育における学力向上への取り組み

野村健太 仲本なつ恵 近藤智 佐藤彰紘
櫻井健太 柴田景子 前島徹

(Kenta NOMURA Natsue NAKAMOTO Satoshi KONDO Akihiro SATO
Kenta SAKURAI Keiko SHIBATA Toru MAESHIMA)

【要約】

《目的》本研究は「生活習慣と学習に関するアンケート」を実施・分析することにより、基礎教育における学力向上のための基礎資料とすることを目的とする。

《方法》本学作業療法学科1・2年次生、計130名を対象にアンケートを行った。自由記載で答える設問は質的内容分析、その他の設問は単純集計を行った。

《結果》自己学習時間の平均は、平日 55 ± 48 分、休日 79 ± 82 分、テスト前の平日と休日はそれぞれ 163 ± 69 分、 300 ± 141 分だった。学習で苦労していることは1・2年次生共に「どう学習していいかわからない」が最も多く、困っている教科は、1年次生は生理学と運動学、2年次生は身体障害評価学が多くを占めていた。解決策は「通学時間や空き時間の有効利用により学習量を増やす」が最も多く分類された。

《結論》単純に学習時間を増やすように指導するだけでは不十分であり、学力差のある学生同士が学習方法を確認できる形でグループ学習を行うことで良好な学習習慣が形成されると考えられる。また、教員による個別対応としては学習方略に基づいて指導することが効果的な学習につながると考えられるが、具体的な関わり方については検討の必要がある。

キーワード：作業療法 基礎教育 アンケート

I. はじめに

日本の高等教育において、『18歳人口の減少とあいまって、「学力低下問題」が大きな社会的関心を集めるようになったのは、90年代末ごろからであった』¹⁾とされている。また、学力低下だけでなく、「学習意欲、学習目的、学習習慣、さらには規範意識に至るまで、高校卒業者の多数派が進学するというユニバーサル化に伴う様々な問題がでてきた」¹⁾とされている。学生の学力向上を始めとして、多くの課題が高等教育に課されている。作業療法教育においても、学生の学力低下や意欲・主体性のなさ、社会的スキルの不

足等の気質がある²⁾と報告されている。本学作業療法学科においては、知識と実践能力のある作業療法士の育成を目指して、初年次教育、臨床実習、国家試験対策などに取り組んでいる。また、入学前のフォローアップ研修や問題基盤型学習(Problem Based Learning; PBL)の推進などの取り組みを行い、学力向上に努めている。この一連の学力向上への取り組みの中で、大学入学後の最初に位置付けられるのが初年次教育である。初年次教育の中心的要素は、「(大学を知らない)1年生を、“組織的に(全学もしくは学部レベルで)”、大学生生活と大学での学習に“円滑に移行”させ、“成功”に水路づける」³⁾とされている。本学

のむらけんた：目白大学保健医療学部作業療法学科
こんどうさとし：目白大学保健医療学部作業療法学科
さくらいけんた：目白大学保健医療学部作業療法学科
まえしまとおる：目白大学保健医療学部作業療法学科

なかもとなつえ：目白大学保健医療学部作業療法学科
さとうあきひろ：目白大学保健医療学部作業療法学科
しばたけいこ：目白大学保健医療学部作業療法学科

作業療法学科の初年次教育は、基礎教育連絡会議を中心に充実を図っている。基礎教育連絡会議とは、作業療法学科1・2年次生の学習状況、生活状況、成績などの情報を共有し、基礎学力向上に対する方策を検討することや、不本意な休退学の防止を目的に、隔週で開かれる会議である。会議の構成員は1・2年次生の担任や1・2年次の授業を多く持つ教員である。1・2年次に学習する解剖学や生理学、運動学は作業療法士国家試験専門基礎分野の問題出題数の5割程度を占めるので、1・2年次の学習状況や成績が国家試験合格率に影響することが推測される。さらに、「入学前に作業療法に対するイメージが具体的でない学生が多く、入学後の学習により、自分の進路に迷いを抱く可能性は大きい」⁴⁾とされており、入学後早い段階の学習環境が休退学を左右する可能性がある。学生の基礎学力向上を土台とし、不本意な休退学を未然に防ぐためにはどのような工夫が必要なのか、そのための環境づくりはどのようにすべきで、学生への働きかけはどのように行うべきかなどを検討する必要がある。基礎教育連絡会議が始まって以降、本学科の学年ごとの特徴を各教員の主観により把握することはあっても、客観的な調査を行ったことはなかった。濱名⁵⁾は、大学教育において必要なこととして「大学や学校が組織的に方

針や戦略を決めて、教員団が共通見解を持つことが出発点である」と述べている。1・2年次生の基礎教育における学力向上に向けてアンケート等の客観的なデータが得られる調査を行い、共通見解を持ちながら対策を練る必要があると考えられる。本研究は本学作業療法学科1・2年次生を対象に「生活習慣と学習に関するアンケート」を実施し、傾向を知ることにより、基礎教育における学力向上のための基礎資料とすることを目的とした。

II. 方法

平成25年度と平成26年度に入学した本学作業療法学科1・2年次生計130名を対象に「生活習慣と学習に関するアンケート」を行った。アンケートは平成26年11月に行った。アンケート実施前に作業療法学科教員から学生に調査目的を説明し、同意を得た。アンケートは無記名とし、基礎学年教育会議を構成する教員8名で作成した(図1)。設問は通学時間、睡眠時間、学習時間、学習に対する困難感、相談相手の有無、苦勞している教科とその内容、苦勞している理由、解決策の提案と学生自身の課題、大学の教育資源の認知度と活用度、学科への要望である。

<p>作業療法学科1, 2年生</p> <p style="text-align: right;">目白大学作業療法学科</p> <h3 style="text-align: center;">生活習慣と学習に関するアンケート</h3> <p>私たち作業療法学科の教員は1・2年時の学力向上が将来作業療法士として活躍する皆さんにとって必須の課題だと考えています。なぜなら、1・2年時の学力が国家試験の成績に影響を与えているという研究があるからです。そこで、現在の学習について皆さんの声を聞き、改善策を考えていきたいと思います。以下のアンケートにご協力ください。</p> <p>①あなたの学年 (1年生 or 2年生)</p> <p>②往復の通学時間 _____分</p> <p>③平日の睡眠時間 _____時間</p> <p>④授業以外の学習時間(平均)</p> <table style="width: 100%;"> <tr> <td>平日 _____分</td> <td>休日 _____分</td> </tr> <tr> <td>テスト前の平日 _____分</td> <td>テスト前の休日 _____分</td> </tr> </table> <p>⑤現在学習に困っている (はい or いいえ)</p> <p>⑥学習について相談する相手がいる (はい or いいえ)</p> <p>⑦苦勞している科目は _____の授業の特に _____について _____の授業の特に _____について _____の授業の特に _____について</p> <p style="text-align: right;">裏もお願いします→</p>	平日 _____分	休日 _____分	テスト前の平日 _____分	テスト前の休日 _____分	<p>⑧なぜ苦勞していますか? 当てはまるもの全てに○を付けてください。</p> <table style="width: 100%;"> <tr> <td>・学習する時間がない</td> <td>・思っていた学習内容と違う</td> </tr> <tr> <td>・学習する気力が起きない</td> <td>・もっと専門的なことを学習したい</td> </tr> <tr> <td>・なぜ学習するのが分からない</td> <td>・学習しているが成績が伸びない</td> </tr> <tr> <td>・その他</td> <td>・どう学習していいかわからない</td> </tr> </table> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>⑨学科としてどのような取り組みをすると⑧の問題が解決するか、またはあなた自身の課題があれば教えてください。</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>⑩学生ピアサポートについて</p> <table style="width: 100%;"> <tr> <td>1, 知っているし利用したことがある</td> <td>学生相談室について</td> </tr> <tr> <td>2, 知っているが利用したことはない</td> <td>1, 知っているし利用したことがある</td> </tr> <tr> <td>3, 知らない</td> <td>2, 知っているが利用したことはない</td> </tr> <tr> <td></td> <td>3, 知らない</td> </tr> </table> <p>⑪その他要望等があれば具体的に教えてください。</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p style="text-align: right;">アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。</p>	・学習する時間がない	・思っていた学習内容と違う	・学習する気力が起きない	・もっと専門的なことを学習したい	・なぜ学習するのが分からない	・学習しているが成績が伸びない	・その他	・どう学習していいかわからない	1, 知っているし利用したことがある	学生相談室について	2, 知っているが利用したことはない	1, 知っているし利用したことがある	3, 知らない	2, 知っているが利用したことはない		3, 知らない
平日 _____分	休日 _____分																				
テスト前の平日 _____分	テスト前の休日 _____分																				
・学習する時間がない	・思っていた学習内容と違う																				
・学習する気力が起きない	・もっと専門的なことを学習したい																				
・なぜ学習するのが分からない	・学習しているが成績が伸びない																				
・その他	・どう学習していいかわからない																				
1, 知っているし利用したことがある	学生相談室について																				
2, 知っているが利用したことはない	1, 知っているし利用したことがある																				
3, 知らない	2, 知っているが利用したことはない																				
	3, 知らない																				

図1 アンケート用紙

分析方法は、自由記載で答える設問については質的内容分析を行った。質的内容分析は、意味のあるテキスト部分の言い換えや統合・削除を行い、カテゴリー化を図る質的データ分析の1つである。その他の睡眠時間や学習時間などの設問から得られた量的データは単純集計を行った。本研究は生活習慣と学習に関する傾向を知ることが目的としており、統計処理を行うことを前提としていないため、量的データに対しては単純集計のみを行った。

なお、大学の教育資源とは学生ピアサポートと学生相談室を対象とした。学生ピアサポートは学年を超えて学生同士で教え合う制度であり、学生ピアサポーターとして登録された学生と学習に困っている学生を教員が結び付ける制度である。学生相談室は学校生活や学習に関して臨床心理士による相談を受けられる個室

が大学内に設けてあり、相談者や相談内容については守秘義務が保障されている。

Ⅲ. 結果

有効回答は1年次生66名、2年次生64名の計130名、回収率は100%だった。往復の平均通学時間と標準偏差は1年次生113 ± 71分、2年次生103 ± 58分、平日の平均睡眠時間は1年次生5 ± 1時間、2年次生6 ± 1時間だった(図2、3)。授業以外の学習時間の平均は、平日で1年次生54 ± 48分、2年次生57 ± 49分、休日は1年次生86 ± 92分、2年次生72 ± 71分、テスト前の平日は1年次生151 ± 66分、2年次生175 ± 70分、テスト前の休日は1年次生265 ± 127分、2年次生335 ± 146分だった(図4、表1)。な

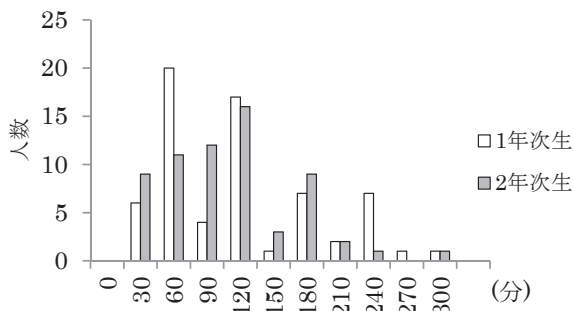


図2 通学時間

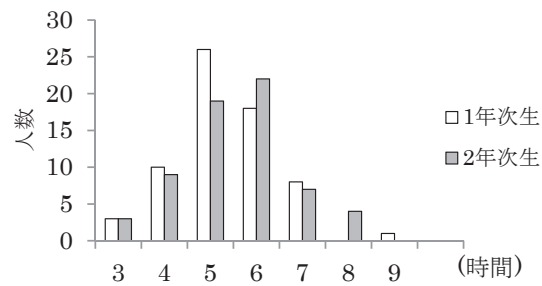


図3 睡眠時間

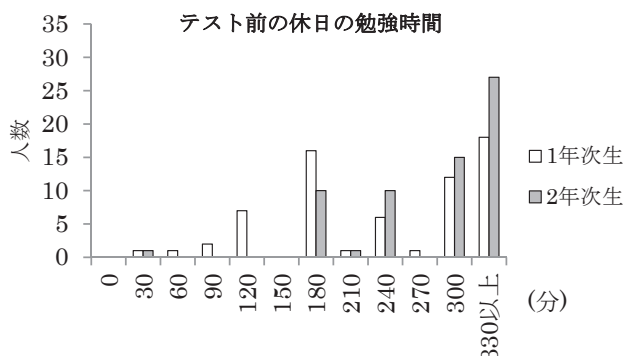
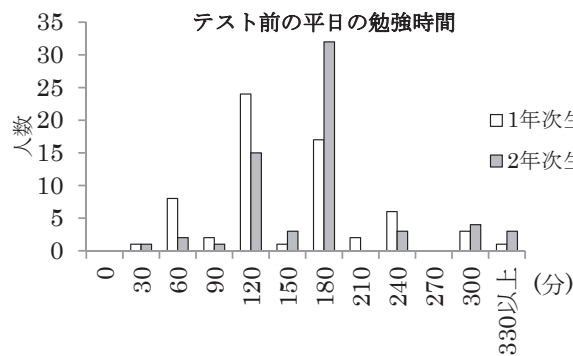
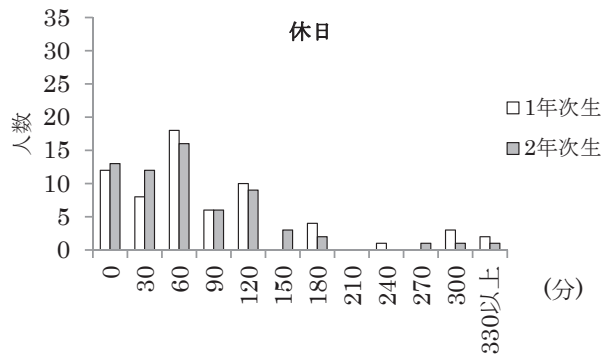
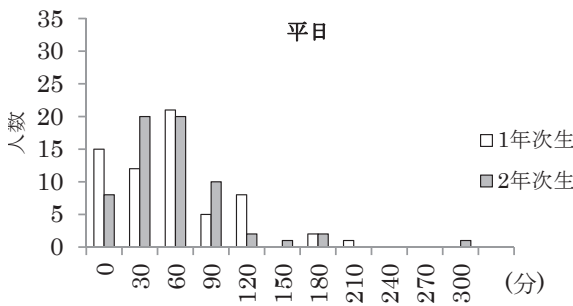


図4 勉強時間

表1 通学・睡眠・勉強時間の平均と標準偏差

	通学時間 (分)	睡眠時間 (時間)	勉強時間(分)			
			平日	休日	テスト前平日	テスト前休日
1年次生	113±71	5±1	54±48	86±92	151±66	265±127
2年次生	103±58	6±1	57±49	72±71	175±70	335±146
全体	108±65	5±1	55±48	79±82	163±69	300±141

お、平日に学習時間が0分だった学生は1年次生22.7%、2年次生12.5%だった。現在学習に困っていると答えた学生は1年次生73.1%、2年次生69.5%だった(図5)。学習について相談する相手がいない学生は1年次生36.9%、2年次生19.0%だった(図6)。学習するにあたって苦勞していることは1・2年生ともに「どう学習していいかわからない」、次いで「気力が起きない」が最も多かった(図7)。学校の教育資源である学生ピアサポートを知らない学生は1年次生58.5%、2年次生79.3%、学生相談室を知らない学生は1

年次生18.3%、2年次生32.7%であった(図8)。学習に困っており、かつ相談する相手がいないのは1年次生28.8%、2年次生18.8%であった。学習に困っている教科としては、1年次生は生理学と運動学、2年次生は身体障害評価学、整形外科、神経内科が多くを占めていた(表2)。学習に関する学科への要望または自分自身の課題として最も多い意見は、「通学時間や空き時間の有効利用により学習量を増やす」が18、次いで「先輩や先生に聞く・質問しやすい環境を作る」と「レポートが多い(から減らしてほしい)」が

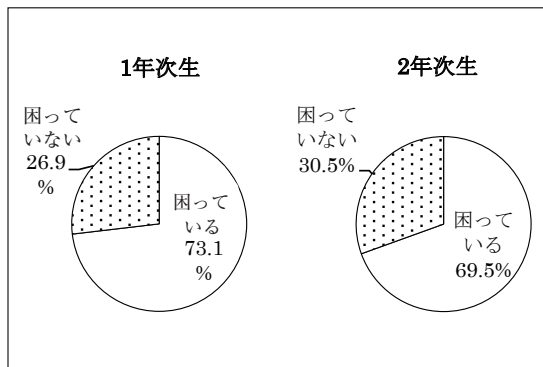


図5 学習に対する困難感

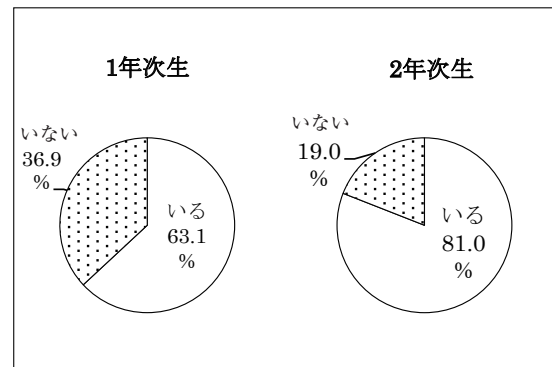


図6 学習について相談する相手

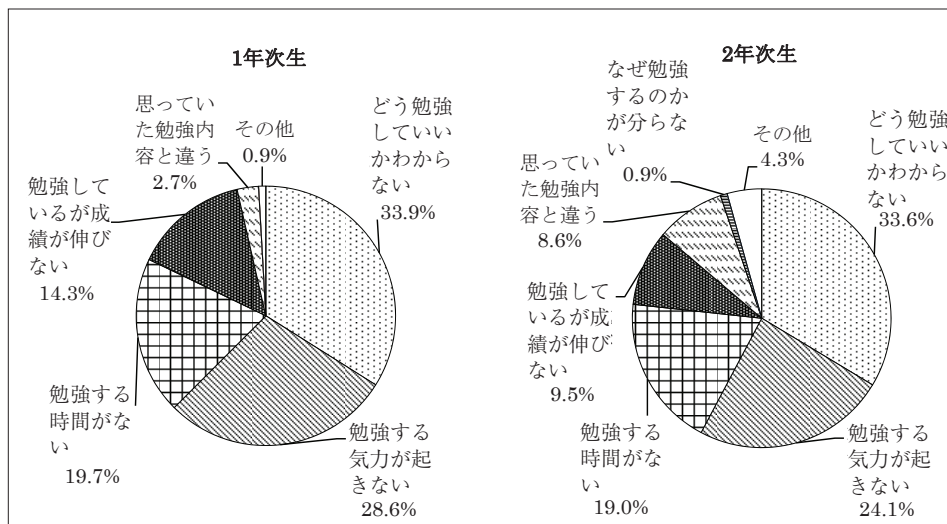


図7 学習に困っている原因

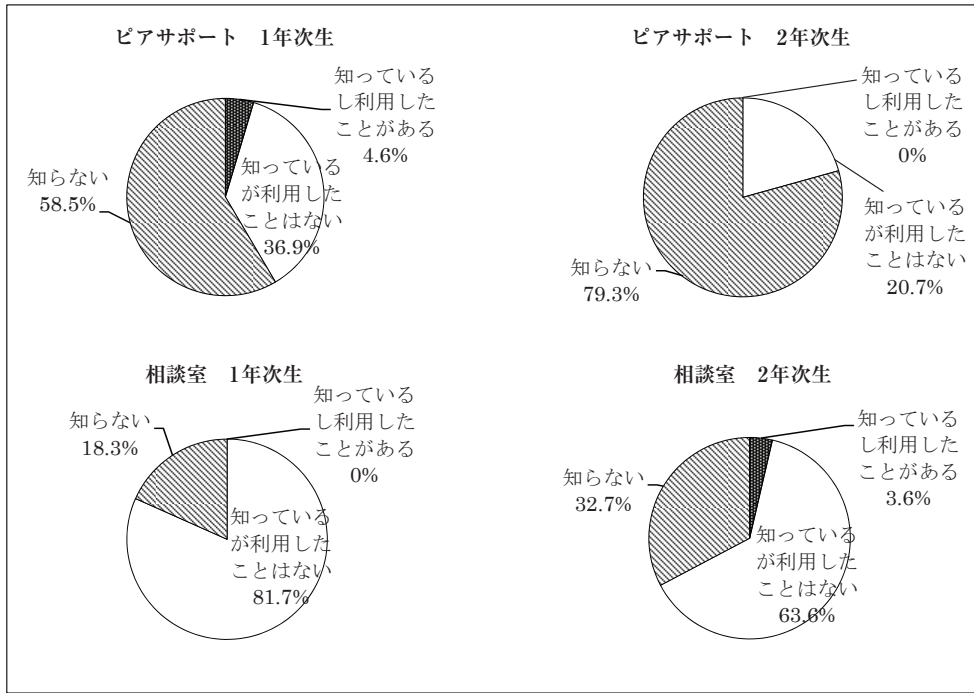


図8 教育資源の認知度と活用度

表2 苦勞している科目

学年	科目	人数	内容
1年次生	生理学	47	小テスト, 全体的に, 勉強方法, レポート
	生理学実習	33	レポート, 解剖
	運動学	33	全て, 筋, 骨, 小テスト, 勉強方法
	解剖学実習	13	筋, 暗記, 上肢・下肢
	解剖学	6	小テスト, 覚え方, 骨や筋肉の名称などについて
2年次生	身体障害作業療法 評価学	36	筋力検査, 実技, 解剖運動生理, 関節可動域, 評価法, 神経, テスト, 触診・神経, 反射, 覚えることが多い
	整形外科	14	全部, テスト勉強, 試験問題の範囲
	神経内科	13	テスト, 全部, 脳神経・脊髄神経, 量の多さ, 勉強方法, 病気の症状について, 脳の分野
	身体障害作業療法 評価学演習	11	実技, 関節可動域, 筋力検査, 解剖実習, 整形外科
	運動学	9	全て, テスト, 小テスト, 筋, トルク

表3 学習に関する学科への要望または自分自身の課題

要望・課題のカテゴリー	データ数
通学時間や空き時間の有効利用により勉強量を増やす	18
先輩や先生に聞く・質問しやすい環境を作る	11
レポートが多い(から減らしてほしい)	11
予習復習が大切	8
授業をよく理解するよう努める	8
場所の確保し勉強の質を上げる	6
どうすればいいかわからない	6
自分で頑張るしかない	4
意欲を上げたい	4
補習授業をしてほしい	3

11であった(表3)。

IV. 考 察

1. 学習時間

第2回青少年の生活と意識に関する基本調査報告書⁶⁾によると、全国400地点の青少年3000人、うち大学生・大学院生238人を対象に、学校以外で何時間学習しているかという調査を行った結果、「ほとんどしていない」が47.5%、「30分くらい」が12.2%、「1時間くらい」が19.3%、「2時間くらい」が12.6%、3時間以上が4.5%、無回答が0.4%であった。本研究の1年次生の平日の学習時間の結果は、「ほとんどしていない」が22.7%、「30分くらい」が18.8%、「1時間くらい」が36.4%、「2時間くらい」が12.1%、3時間以上が4.7%であり、本学科1年次生は「ほとんどしていない」割合が少なく、30分から2時間学習をしている割合が多いことが示された。平日休日ともに授業以外の学習時間が0分から30分の学生に対しては授業の空き時間や通学時間の有効活用など、学習時間を確保するよう促す必要があると思われる。一方、本学科1・2年次生のカリキュラムは毎日ほぼ隙間なく授業が組まれていることから、平日に1時間から2時間学習している学生に対しては学習時間を増やすことによって学力向上を図ることは無理が生じる可能性があると考えられる。学習の量よりも学習の質、即ち学習方法を検討することが学力向上につながると思われる。

2. グループ学習

本学科のカリキュラムは1年次の運動、生理、解剖学の基礎医学の知識を元に2年次の身体障害評価学や整形外科・神経内科等を学ぶように組まれている。しかし、多くの学生が生理学や運動学、身体障害作業療法評価学に苦勞しており、その原因は1・2年次生共に「どう勉強していいかわからない」が最も多いという結果となった。これはまず授業スタイルの変化が関係していると考えられる。高校では板書での講義が中心であったが、大学ではパワーポイントを使った講義や実習が中心になり、授業の進む速さは速くなる。授業内容は医学的・専門的になり、手持ちの文献だけでなく理解を深めるための参考文献を図書館で探したり、文献検索サイトで論文を探したり、さらにそれら

の資料をファイリングする必要もある。作業療法基礎教育に適応するためには高校までの学習方法とは大きく異なることが考えられる。それに適応できない学生が「どう勉強していいかわからない」と回答していると思われる。小橋ら⁷⁾は、「(作業療法士国家試験の)低得点群は、中得点群とも増して、下位学年の頃から学習習慣が身についておらず、基礎学力も低い」と述べている。さらに「低得点群の学生に対してグループ学習を行うことで漠然とした不安状態から抜け出し、現実検討を高める効果があった。(中略)日々の学習計画や優先順位の決定に際し、教員が集中的に関わる」ことが学力向上につながったと述べている。即ち、学習の方法をそれ相応に身に付けている学力の高い学生と「どう勉強していいかわからない」学生と一緒にグループ学習を行うことで学習方法を確認し合うことが有効であると考えられる。その上で教員が関わることでより効果的に学力向上につながると思われる。

本学科においては1年次の春学期に5～6人の小グループでテーマを与えられ課題に取り組む基礎ゼミという授業がある。2015年のテーマは「目白大学が障がいを持つ方にとって利用しやすい大学かどうか現状を把握し、どのような改善ができるか提言を行う」であった。教員は学生がわからないことや専門的なことを教えるのではなく、「わからないことはどのように学ぶか」という道筋・方法を示し、学生の主体性を引き出すように関わる。ゼミの構成員は春学期の約3ヶ月間に変更がなく、入学したばかりの1年次生にとって学習や生活面に至るまで良い相談の場になることも少なくない。しかし、秋学期になるとゼミでの授業はなくなり、グループ学習は減ってしまうことで、学習習慣や学習方法を相談する機会は減ると思われる。講義とグループ学習を組み合わせる授業を進行することや、秋学期も定期的に基礎ゼミのメンバーでグループ学習を行う機会を設定することで「どう勉強していいかわからない」学生や学習に困っており、かつ相談する相手がいない学生は減ると考えられる。また、学生ピアサポートと学生相談室の利用を勧めることも有効だと考えられる。

3. 学習方略

学習に関する学科への要望または自分自身の課題(表3)では、「通学時間や空き時間の有効利用により

表4 学習方略を測定するための質問項目 (植木, 2002)

精緻化方略	*は逆転項目を示す
<ul style="list-style-type: none"> *勉強内容を覚えるとき、意味が分からない言葉は頭の中で繰り返して覚える 何かを読んでいるとき、読んでいることと自分が知っていることを関係づけようとする 勉強していて何か難しい言葉があれば、自分が分かるような言葉に置き換えて理解する *勉強していて分からないことが出てきたら、そのまま暗記する 勉強で何か覚えられないことが出てきたら、自分が覚えやすいように工夫して覚える 勉強内容を暗記する前に、それが頭に残りやすいような形に変えて覚えようとする 	
モニタリング方略	
<ul style="list-style-type: none"> 授業中や授業後に、先生が言ったことを自分が理解できているか問い直してみる 問題を解いていて分からなくなったとき、どこでつまづいているのか一度考えてみる 勉強してきたことを確認するために、自分自身に質問する 読んでいるときに、一度中断して、読んだ内容を確認しながら読み進める 何かを読んでいるときに、自分がどの箇所まで理解できているのか考えながら読む *教科書や参考書を読むとき、自分が内容を理解できているのかどうか分からない 	

勉強量を増やす」「先輩や先生に聞く・質問しやすい環境を作る」という意見が多く分類されたが、「3. グループ学習」で示したようにグループ学習を行う機会を設定することで改善できると考えられる。少数意見においては、「授業をよく理解するよう努める」「勉強場所を確保し勉強の質を上げる」「自分で頑張るしかない」「意欲を上げたい」というやや具体性に欠ける意見が分類された。これらに対応するためには、教員による個別の対応や他学生とのディスカッションにより、内容に具体性を持たせたり、意欲が向上するよう促す必要があると思われる。学力向上のための個別対応についてのより理論的な考えとして「学習観・学習方略の意識化と変容」がある。瀬村ら⁸⁾は、「学生自らに学習観・学習方略を意識化させ変容を促すことが学業成績の向上につながる可能性」があると述べている。学習観とは、「学習とはどのようにして成立するのか」という学習のしくみに関する考え方」であり、学習方略とは「様々な学習方法を目的に応じて組み合わせたもの」⁹⁾である。学習観を理解することは、どのように学習すれば成果を上げることができるかを理解することにつながり、学習方略を理解することはより効率の良い学習方法を身につけて学習を行うことにつながると考えられる。中でも学習方略に基づいて学生個別に対応することでより具体的な問題解決が可能になると考えられる(表4)。今後、学生に学習方略を意識化させるためにはどのような働きかけが教員に求められるのか検討していく必要があると考えられる。

4. 研究の限界と今後の課題

本研究の結果は自由記載に対しては質的内容分析を行ったが、勉強時間や睡眠時間などの量的データに対しては統計処理を行っていないことから、学習に対する困難感と学習時間等の関連性は明らかになっていない。また、今回は横断的な調査であったが、縦断的な分析をするためにも追跡調査が必要になると考えられる。

V. 結論

本学作業療法学科の基礎教育における学力向上のために、授業以外の学習時間が0分の学生に対しては授業の空き時間や通学時間の有効活用など、学習時間を確保するよう促す必要がある。しかし、毎日ほぼ隙間なく授業が組まれている学生に対して単純に学習時間を増やすように指導するだけでは不十分であり、学力差のある学生同士と一緒にグループ学習を行い、学習方法を確認し合うことで良好な学習習慣が形成されることが考えられる。また、教員による個別対応としては学習方略に基づいて指導することが効果的な学習につながると考えられるが、具体的な関わり方については検討の必要がある。学習に対する困難感と学習時間等の関連性については、今後も調査が必要である。

【文献】

- 1) 杉谷祐美子：リーディングス 日本の高等教育 2 大学の学び 教育内容と方法. 多摩川大学出版部 66-67 (2011)
- 2) 高木邦子：現代の学生気質とその対応. OTジャーナル 45, 320-325 (2011)
- 3) 濱名篤：大学生にとっての円滑な移行. 大学教育学会誌 26, 37 (2004)
- 4) 秋山なつ, 岸上博俊, 村田和香：作業療法教育と学生の職業興味における問題点—VPI 職業興味検査を用いて—. 作業療法教育研究 9, 20-26 (2009)
- 5) 濱名篤：学生が自ら学ぶようにするために 高等教育における学習支援の必要性. 看護教育 50, 568-573 (2009)
- 6) 内閣府政策統括官：第2回青少年の生活と意識に関する基本調査報告書. 40-45 (2001).
<http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/seikatu2/pdf/2-1-3.pdf> (2015年10月1日検索)
- 7) 小橋一雄, 竹嶋理恵, 長谷川辰男, 大関健一郎, 船山朋子, 鈴木幹夫, 本間信生, 石井孝弘, 近藤知子：作業療法教育における本学独自の国家試験教育プログラムの開発. 帝京科学大学医療科学部作業療法学科, 帝京科学大学紀要 10, 43-49 (2014)
- 8) 瀬村江里子, 平岡行博：松本歯科大学第2学年学生の学業成績の変化と学習観・学習方略—07年度から10年度までの第2学年学生を対象として—. 松本歯学 37, 17-24 (2011)
- 9) 植木理恵：高校生の学習観の構造. 教育心理学研究 50, 10-301 (2002)

(2015年10月12日受付、2015年11月30日受理)

Activities to improve the basic educational environment in the department of occupational therapy

Kenta NOMURA¹⁾, Natsue NAKAMOTO¹⁾, Satoshi KONDO¹⁾, Akihiro SATO¹⁾,
Kenta SAKURAI¹⁾, Keiko SHIBATA¹⁾, Toru MAESHIMA¹⁾

【Abstract】

Objective: The purpose of this study was to prepare a basic document for improving the basic educational environment.

Methods: The subjects were 1st and 2nd year occupational therapy students (n=130). The investigation method was a questionnaire about lifestyle and learning. The analysis method was simple tabulation and classified free writing through Qualitative Content Analysis.

Results: The average self-learning time was 163 ± 69 minutes on weekdays, 300 ± 141 minutes on holidays. Before the test, the average self-learning time was 79 ± 82 minutes on weekdays, and 55 ± 48 minutes on holidays. Most students answered “I don’t know how I might study by myself.” Most 1st year students were troubled with physiology and kinematics, and most 2nd year students were troubled with the evaluation of physical disability. The solution resulted in an “increased quantity of learning by the amount of time attending school and the amount of spare time”.

Conclusions: Increasing study hours is insufficient. Because when students with a scholastic ability difference study in a group, a good learning custom is formed. In addition, improvement of learning quality has a correlation with the individual ability to cope with a learning stratagem; however, the exact correlation needs to be examined.

Keywords occupational therapy, basic educational environment, questionnaire

1) Department of Occupational Therapy, Faculty of Health Science, Mejiro University